Uncle Tom's Cabin に於ける黒人英語の発音

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/37431

Uncle Tom's Cabin に於ける 黒人英語の発音

北　川　憲　明

I　INTRODUCTION

黒人英語は Negro English, Negro Dialect あるいは最近 Black English とも言われるようだが，この拙論に於いては1852年に出版されたアメリカの代表的な古典的名著である H. B. Stowe 夫人の『アンクルトムの小屋』を選び，その中に登場するケンタッキーの農園の奴隷や召使い達が話す言葉を発音の面から文献を援用しつつ，その音を推定した。これがこの小論の主眼である。文学作品を通して，つまり Literary Dialect を媒介として音価を推定することは多少の誤まりを覚悟しなければならぬが，19世紀中葉のケンタッキーの黒人奴隷が話していた言葉の発音を知るには過去のデータを通してより他に手はない。幸いストウ夫人はこの作品の最後の章で，この物語の大部分が実際に起っている出来事であって彼女自身の観察か，個人的な友人の観察に基づくと述べ，更に登場人物の言葉の多くは彼女自身が聞いたか彼女に報告されたままであると言っている。そこで私は Literary Dialect のもつ限界は確かに存在するけれども，彼女の言及を信ずることによって，ある程度その当時話されたままの姿であることについて信憑性が得られると考えた。

New York, Washington D. C., Detroit, Chicago 等へ南部から黒人が職と自由を求めて大量に移住し大きな社会問題を引き起したことや社会言語学という新しい言語学が生まれ黒人英語の研究が1960年以降急速に進んでおり文法の幾つかの点で諸学者の間で説が分れているが，ここでは発音の観点から variants を取り上げて分類し簡潔に考察した訳である。しかし以下に取り上げた多くのものは現在でも米国の他の地域でも容易に発見できる。

米国の黒人は元来，奴隷として主にアフリカから輸入された訳であるから彼等の話す言葉は，Gullah Dialect の様な特殊なものを除き農園組織の over-seers の言葉つまり中小の farmers の言葉を受け継いだと考えられるので黒

人の言葉が白人の労務者の話す vulgar English とある程度似ているのは頷ける。この作品では白人の Haley, Locker, Legree なる三人物の会話に黒人とかなり重複する発音が見られるが，特に Haley について作者は "His conversation was in free and easy defiance of Murray's Grammar, and was garnished at convenient intervals with various profane expressions,…"[1] と述べている。そこで私はこの小論に於いて第二の要として黒人の発話の用例だけでなく無教養な白人のそれをも補足的にあるいは比較する目的で取り上げた。そしてその変則的な発音が主として黒人に限られている場合には，その旨を指摘したり説明を与えた。更に結びの所で黒人の英語と白人の vulgar English との根本的な差異について触れ，第三の要として，G. P. Krapp がこの作品に出てくる黒人達，とくに Uncle Tom の妻 Aunt Chloe の言葉でさえその作り出されたイメージは不完全であると *The English Language in America* Vol. 1 の中で述べたことにつき私の考えを記して終ることにする。

テクストと省略記号は次の通りである。

Harriet Beecher Stowe, *Uncle Tom's Cabin* (London: Cassell and Co., n.d.)/*EDG*=*The English Dialect Grammar*, N=Negro, W=White, D=*Desire Under The Elms*

II ANOMALY IN VOWELS

異綴りで示される Literary Dialect は正確に実際行なわれている発音とは一致しないし またいかなる音声記号をもってしても正確に再現出来るものとも思われないので国際音標文字により表記することにした。

A. Shifting to 〔ɑ:〕:

1. 〔ɔ:〕>〔ɑ:〕 larn=learn(P.23. Chloe)/sartain=certain(P.24. Chloe) consarn=concern(P.48. a woman)/sarve=serve (P.49. Chloe) 'arnt=earned(P. 55. Mr. Symmes)/ marcies=mercies (P. 84. Tom)

この *ar* から *er* の変化は元来，14世紀の初期に Kent で始りそれから Essex, Suffolk や Norfolk へと広まった。14世紀の間にこの新しい形態は Kent か Essex よりあるいは両者より非常に緩慢にロンドン語に浸透しはじめたのである。これは最初

は上流階級の言葉ではまれであったが徐々に地歩を固め16世紀にはこの形態が流行した[2]。Krapp は *sartain* や *larn* が New England 方言の目印であるという[3]。

2. 〔ɛ:ə〕>〔ɑ:〕 dar=there (P. 23. Chloe)/thar=there (P. 24. Chloe)/b'ar=bear (P. 37. Tom)/swar=swear(P. 38. Lake)/car=care(P. 66. Sam) fa'r=fair(P.88.Haley)/thar=their(P.88. Tom)/fály=fairly(P. 170. a company of Locker)/ha'r=hair(p.181.Dinah)

黒人は post-vocalic *r* を発音せず glottal sound が彼等に特有であることから *dar* などは *dah* の様に発音されるであろう。この発音は南部式の最も顕著な例であると述べられてきたが，その起源に於ては決して南部アメリカ英語に特有ではないが，北部では教育の普及によって事実上根絶されただけなのであり，北部では文盲な人々の colloquialism として残っているのである。

3. 〔æ〕>〔ɑ:〕 bar'ls=barrels (P.27. Chloe, P.48. a woman)/larder=ladder (P.68. Sam)

この flat *a* の代りの broad *a* は，かつて New England でかなり common であった様である。例えば *man* を *mahn* の様に発音するのもこの類いであるが，今日でも General Southern で聞くことができる[4]。Ozark 方言でも *barrel* は *bahr'l* となっている[5]。

4. 〔ɔ:〕>〔ɑ:〕 sarcy~saucy (P. 25. Chloe, P. 94. a coarse-looking Kentucky fellow)

この音は New England 以外では一般的ではなかったようだ[6]。

B. Shifting to 〔e〕:

1. 〔ʌ〕>〔e〕 jest=just(P. 9. Haley)/jes=just(P. 372. Chloe)/shet=shut(P. 53. Haley)

EDG によると主に Eastern, Southern 方言や Scotland の一部を含む地域で *just* に〔e〕が見られるのであり，当然これら諸方言音が米国にもたらされたとみてよいだろう。

shet については，Mencken は，まだ多少用いられているが徐々に女教師に届しつつあり *shut* にとって代わられるようだと印象を述べている[7]。1848年の Bartlett の Americanisms の辞典の中でその当時 *shet* は common use だとされている。

2. 〔i〕>〔e〕 set=sit(P.23. Chloe)

アメリカ英語の〔i〕は〔e〕に大変近く区別するのが困難であるので，この発音は多分〔i〕と〔e〕の混同の結果であろうがまた他動詞としての *set* と自動詞としての *sit* の混乱として音韻論としてよりも文法論の範疇に入れるべきか。

3. 〔æ〕>〔ɛ〜e〕 ken=can(P.83. Chloe)/hev=have(P.181. Dinah)

a に関してヤンキーは時々ある矛盾を示すのである。(矛盾と言ったのは *ladder* や *man* には broad *a* を与える場合もあるから) 例えば *have* の代りに *hev*, *handy* の代りに *hendy*, *as* の代りに *ez*, *that* の代りに *thet* という具合いに close で obscure な音を与えるのである[8]。この音は南部と分ち合っているが文学方言としては New England 方言の特徴と見做されるかもしれない。

4. 〔ei〕>〔e〕 mebbe=maybe(P.27. Chloe, P.336. Sambo)

この音は標準語においてよりも方言においてしばしば現われる[9]。

5. 〔ɔ〕>〔e〕 tettering=tottering (P.74. Cudjoe)

C. Shifting to 〔i(:)〕:

1. 〔ɛə〕>〔i:〕 skeer=scare(P.36. Chloe)/skeery=afraid(P.41. Sam)
cheer=chair(P.49. a Negro servant)

M.E.〔e:〕も〔ɛ:〕も *r* の前では Mod. E. になる時に共に〔i:〕に変化してしまったのであるが，他方当然変化すべき環境にありながら *tear* (verb), *bear* (verb and noun) 等の語においては〔ɛ:〕のままで残ってしまったのである。それでこの状況が usage の逸脱を招いたのである。つまり例えば *care* から *keer* に *chair* から *cheer* へと音韻法則に従がったのである。Mencken によれば，*care*, *scarce* や *chair* における long *e* への変換は南北戦争の前夜に plain people によって引き起されたと言う[10]。

2. 〔ə〕>〔i〕 charrit=chariot (P.64.Sam)/reckin=reckon (P.303.Sambo)

on から *in* への変化は強勢のない発音によるのであるが，口の開きが少ないため前舌母音化したものであろう。

3. 〔ʌ〕>〔i〕 sich=such(P.49. Chloe,Andy)/jist(P.51. Tom, P.372. Chloe)

Ozark 方言においては，*u* は色々な音に発音され *such* は *sich* と書かれている[11]。

この方言音の分布をみると Scotland, Ireland およびほぼ England 全般にわたり，この音の米国への伝播が容易に領ける。*just* については〔i〕が〔e〕に非常に近く発音されるため *jist* や *jest* となったりする。

4. 〔e〕>〔i〕 Gineral=General (P.25. Chloe)/stiddy=steady (P.282. Sambo)
kintuck=kentucky (P.287. Tom)

現在では〔e〕を有する多くの語で，かつては〔e〕と〔i〕の間を動揺していたが，これは通常アイルランド英語の発音の特徴の一つと今日では考えられている[12]。しかし私はこれは言語における自然な音声現象ではないかと思う。この推移が日本語の方言においても一般的である様に英語の場合も一種の口蓋化現象であると言ってよいのではないかと考える。

5. 〔ə:〕>〔i:〜iə〕 peart=pert(P.26. Tom, P.336. Legree)

現代英語の Standard な *pert* の変形である *peart* はまだ方言で普通でありまたしばしば昔の New England 方言物語に記録されている[13]。この語は明らかにイギリス方言よりの survival であって，*EDG* によると〔piət〕は England の色々な地域で特に Northern 方言で見られるが意味においては今日では Americanism であるらしい。

6. 〔i〕>〔i:〕 leetle=little (P.6. Haley, P.65. Sam)

J. Wright はイギリス方言の Eastern や Southern の一部を cover している地域で *little* を〔lītl〕としているので[14]，米国におけるこの *leetle* もこれら英国諸州よりの移民の影響とみてよいだろう。H. C. Wyld は「現在の標準英語で我々は通常 *live*, *give*, *written*, *shriven*, *little*…*pity*, *stick* vb. などにおける如く OE, ME ī を有する短い語の形態を保っているが現在より Modern 期の最初の 4 世紀間は〔ī〕をもった長い形がはるかに普通であって，*pity* の代りの *peey*〔pīti〕はしばしば最近まで聞かれ *leetle*〔lītl〕は "very little" の意味でおどけた風にまだ用いられる[15]」と述べていることからも Southern drawl ではない。Mencken は米国では，*leetle* はほとんど消滅している[16]と言う。

D. Shifting to 〔o〕:

1. 〔e〕>〔ɔ〜o〕 sot=set (P.89. Tom, P. 373. Chloe)

Thornton は *sot* を元来 native English であったが多少滑稽に米国で用いられるもので *set* あるいは *sat* の corruption としている[17]。一方，Krapp は *sot* を New

England 方言の目印とされると述べているが，Mississippi 州でも黒人だけがこの音を用いている[18]。また Eastern Kentucky を含む South Midland でも見い出せる[19]がかつてほど今は聞かれない様である。

2. 〔ʌ〕>〔ɔ〜o〕 onpleasant=unpleasant (P.9. Haley)/onlucky=unlucky (P.48. a woman)/oneasy=uneasy(P.49. Chloe)/onreasonable=unreasonable=unreosonable(P.62. Haley)

この発音について Jespersen も適格な説明を与えておらず，ただ Dickens 等の作家を信ずれば vulgar English で *on-* 形が fashionable であると述べている[20]だけである。この形が Ireland や Cumberland や Derby（そこでは *o* が *u* の normal な発達である）で見い出すことが出来るので Ulster Scots による影響もあったのかもしれない。その他に考えられる原因として前置詞 on〔an, ɒn, (ɔ:n)〕との混乱かと臆測するのだが，はっきりしない。

E. shifting to〔æ〕:

1. 〔ə:〕>〔æ〕 gal=girl (P.6. Haley, P.53. Sam)

この形は vulgar に発音される時の phonetic spelling であるが[21]，イギリス方言に由来していると思われる。

2. 〔e〕>〔æ〕 yallow=yellow (P.10. Haley)/*wal*=well(P.64. Sam)

yellow の母音で〔æ〕を有する popular な方言がまだ存在するし又訂正されるべき昔の発音表の中でもこの音を見い出せる。Walker は Sheridan や Scott 等がすべてこの *yellow* を *tallow* と韻を踏ませていると記しているがしかし彼もこの音を認めずに vulgar に近いと考えていた[22]。

wal については発音は〔wa:l〕と drawl するかもしれない，事実 U. O'Neill は田舎臭い New England 方言で書かれている彼の劇 *Desire Under The Elms* の中で *well* を *waal* と表記している。*EDG* によると〔wāl〕を north Kent や Sussex で〔wæl〕は south Norfolk, south-east Kent や West Dorset で見い出す[23]が，ストウ夫人の表記 *wal*（同一人物でも *wal* とならず *wall* となる場合もある）は〔e〕の sloven な発音のために〔æ〕が better だと考える。Spelling Pronunciation としての〔a〕の可能性もある。

F. Shifting to〔ʌ〕:

1. 〔u〕>〔ʌ〕 tuck=took(p.36. Chloe)

oo で綴られる発音は主に〔u〕,〔u:〕,〔ʌ〕であるが，18世紀頃はこれらの間で変動が多く，この *took* における〔ʌ〕音が米国南部には比較的多いのは Mod. E 初期以来の変動を示したものに他ならない[24]。

2. 〔ə:〕>〔ʌ〕 fust (est)=first (est) (p. 25. Chloe, p. 60. Haley) / bust=burst (p.44. Sam)/wus(s)=worse (p. 49.Chloe. p.51. Haley) wuth=worth (p.104. Aunt Hagar)

この変化は〔r〕の消失によるが特に，*s* の前の *r* は早い時期に消失したと言われる。

J. Wright は "ir+子音" において〔r〕は England の方言で消失し母音は一般に徐々に〔ʌ:〕,〔ə:〕と延びてきたが，中東，南，南西諸州では〔ʌ〕,〔ə〕にまでしばしば短くなった[25]と述べているのでこの発音は上記英国方言よりの survival であろう。

3. 〔ɑ:〕>〔ʌ〕 ruther=rather (p.52. Sam, p.305. Sambo)

EDG によると〔rʌðə(r)〕は south Oxford, east Suffolk や southwest Devon で，また Ozark 方言でも *ruther* として見い出せるが，黒人のぞんざいな発音であろう。

4. 〔ou〕>〔ʌ〕 hull=whole (p.131. Haley)/dun=don't (p.208. Topsy)

これはいわゆる伝統的な New England の "Short o" であって *coat*, *home* がほとんど *cut*, *hum* の様に聞えるのであるが今では最も remote な地域を除いて消滅している[26]。

G. Shifting to 〔ə(:)〕:

1. 〔ɔ:〕>〔ə〕 fur=for(p.42. Sam)/nur=nor(p.83. Tom)

これらの spellings は無強勢の発音を示すが〔ʌ〕の可能性もある。

2. 〔ou〕>〔ə(:)〕 fellers=fellows (p. 9. Haley)/widder=widow (p. 27. Mose) winder=window (p. 65. Sam)

無強勢音節における *ow* は通常英・米両方言で〔ə〕の様に発音される。この発音は17世紀英語では frequent であったので，この古い発音が米国に伝播されたと考えざるを得ぬ。G. P. Krapp も *ow* 音節は弱められた音価で発音されるが外部の影響を受けずに純粋音声現象だけでこの様に転訛したとは考えられない[27]と言っている通りある。

H. Other Cases:

1. 〔iə〕>〔i:〕 idee=idea (p. 40. Sam)/reely=really (p. 88. Smith)

Substandard な発音として ***real*** や ***really*** における成節的音質の *l* がしばしば認められず ***really*** は二音節となり ***real*** は単音節となるがこんな風に発音される時母音は lower されずに〔ri:li〕〔ri:l〕の様に聞えるのである[28]，と Krapp は言うが本来〔i:〕とあるべきもので〔i:〕が〔i〕に開母音化したのは次にある〔ə〕の影響であって〔ə〕の loss によるとも考えられる。

2. 〔iə〕>〔ɛ:〜e:〕 rael=real (p.38. Andy)/re'lly=really (p.48. a woman)
reily=really (p.60. Haley)/raily=really (p.68. Sam)
rail=real (p.104. Aunt Hagar)

これらの綴りは，しばしば田舎譬きのする New England 発音の特徴として見做されるが，しかしそれは一般的な米国の popular な usage であったようである。Jespersen は，これは多分〔i〕の lowering 以外の何ものでもない[29]と説明しているが，Krapp はこれに反対して少なくともこの語においてこの発音は〔e:〕が〔i:〕にまで raise されなかったより古い英語の発音の survival だ[30]と述べている。

3. 〔iə〕>〔ɛə〜ɑ:〕 clar=clear (p.26. Chloe, p.42. Sam)/har=hear (p.65. Sam)

この音はより古い一般的な発音であろうかそれとも黒人の粗雑な発音法によるものか。いずれにしても，黒人では〔ɛə〕が更に lower して〔ɑ:〕の様に発音されるだろう。(M. Twain の「ハックルベリ・フィンの冒険」で黒人の Jim は ***clear*** を ***clah***, ***hear*** を ***heah*** の様に発音している)

4. 〔iə〕>〔ɛ〕 ferce=fierce (p.372. Chloe)

Webster は中，南部諸州で ***fierce***, ***pierce***, ***tierce*** は ***feerce***, ***peerce***, ***teerce*** と発音されるが彼はこれを誤っていると考え，標準音は ***ferce***, ***perce***, ***terce*** であって New England で universal だ[31]と言うのである。

5. 〔ɔi〕>〔ai〕 spile=spoil (p. 10. Haley)/pint=point (p. 25. Chloe)
p'isin=poison (p. 60. Locker)/jine=join (p. 82. John)

この古い発音は，方言で少数の語にまだ存在しているが cultivated speech からは完全に姿を消してしまっている。中世英語では二重母音 ***oi*** は ***boy*** の ***oy*** の様に発音されたが，近代英語初期にこの発音は ***wine*** の ***i*** の発音と同化するようになったのでありこの用法が米国の植民時に普及したのである。植民者はこの様にしてこの音を伝播

させたが英国では18世紀末にこの *i* 音が綴りによる演繹によって多くの語で元の *oi* 音と取って代られたのである。そしてこの復活した新しい発音が米国のpolite speech にすぐ広まった[32](訳である。

6. 〔ɑ:〕>〔e:～ei〕 raytherーrather (p. 292. Legree)

〔reiðə(r)〕という発音は開音節における M. Eä の normal な発達を示すのであるが今では方言的にしかすぎない[33]。 *EDG* によると *rather* におけるイギリス方言音〔ɛ̃〕は主に北部方言や Scotland に見い出せるので Ulster Scots の影響か。あるいは単に〔ɑ:〕の corruption (訛り) によるのか。

Ⅲ ANOMALY IN CONSONANTS

A. Change of Dental Fricative:

1. 〔θ〕>〔f〕 somefinーsomething (p.23. Chloe)

この推移は米国南部の黒人音の特徴となっているが,〔θ〕と〔f〕の間には発音上の類似性の当然の結果のために多くの言語でこの二つの音の交換を見ることが出来る。Jespersen は vulgar English では〔θ〕の代りに〔f〕を使用する傾向があり Dickens が *nothing* の代りに *nuffin* を, Thackeray が *oaths*, *mouth* の代りに *oafs*, *mouf* を使っている[34]と例証しているが, イギリス方言には極めて少なく〔θ〕>〔f〕推移は俗語音として音声的に独自に発生したものと思う。

2. 〔θ〕>〔t〕 troughーthrough (他のテクストで)/tinkーtinkーthink(p.207.Dinah)

この音も黒人英語の特徴と見做されているが〔t〕音は容易に調音上類似したその他の音と聞く耳によって誤まられる故この音が無知なる黒人によって使用されているのであろう。

3. 〔ð〕>〔d〕 datーthat (p.23. Chloe)/deーthe(p. 23. Chloe)/danーthan (p.23. Chloe)/widーwith (p.23. Chloe)/deyーthey (p.24. Chloe) denーthen (p.27. Pete)/deseーthese(p.40. Sam)/disーthis(p.41. Sam)/bredrenーbrethren (p.68. Sam)/furderーfurther (p. 83. Tom)/togederーtogether (p. 105. Aunt Hagar)

この音も黒人英語の代表的な特徴と見做されているが〔ð〕が音声的に訛ったのかそれともイギリス方言音の伝播なのか。Krapp もあいまいな事を述べており, この *d* について歴史的な研究の余地があると思う。最近の研究では語頭の〔ð〕は前の語の最終子

音が〔l〕,〔m〕,〔n〕以外の時〔d〕となる頻度が最も高い。

4. 〔ð〕>〔r〕 nerry=another (p. 207. Dinah)/turry=t'other (p. 207. Dinah, p. 220. Chloe)

r は通常 roll しないが黒人は *th* の代用として使う時に roll する[35]のである。多分これはバージニアの Gullah Dialect 等の影響を受けたのではないかと思われる。

B. Other Cases:

1. 〔v〕>〔b〕 ber(r)y=very (p.25. Chloe, p. 42. Sam)/gib=give (p. 42. Sam) debil=devil (p.305. Sambo)

子音 *v* は Gullah Dialect では *b* となっていて[36], その上この変化は Gullah Dialect に限らず, 例えば Mississippi 州でも黒人のみが *give* の代りに *gib*, *save* の代りに *sabe*, *devil* の代りに *debil* を用いている[37]が, Gullah Dialect では *v* と *b* が同一音素であるのに対し Gullah Dialect 使用者以外の黒人は無知なるが故に少数の単語でまだ *v* を〔b〕と発音しているものと考えたい。

2. 〔tʃ〕>〔t〕 natur=nature (p.8. Haley, p. 50. Tom)/critter=creature(p.9. Haley)

この *natur* の〔t〕は New England でも特に無教養な人々の発音の特徴であり粗野で滑稽な響きがする発音として劇作家や小説家が18世紀から19世紀にかけての田舎者ヤンキーを描く時の常套手段としてこの発音を使った[38]。

creature は *critter* あるいは *cretur* として New England に限らないことは, 前に挙げた M. Twain の作品の中で Huck も Jim も *cretur* を使用していることからも解る。

3. 〔h〕>〔d〕, e. g. dat ar road was fenced up and down by *der*(=her) creek (p.53. Sam)/I hope the gen'leman and *der* fair sex will 'scuse my usin' an or'nary sort o' 'parison (p. 68. Sam)/I ruther guess *der* weight's in it (p. 305. Sambo)

Ⅳ DROPPING OF SOUNDS

Harrison が黒人英語はまったく "an ear language" である[39]と言うように, これは英語の持つ Monosyllabism の傾向と一致するものである。

この作品でも多くの省略音が見い出されたが特に〔m〕音の省略である *su-thin'* (=something p.220. Chloe), 〔n〕の省略の *ary*(=any p.68. Sam), 〔ð〕の省略の *ar*(=there p. 25 Chloe 等) が noteworthy であろう。(以下省略)

V ADDITION OF SOUNDS

A. Addition of Consonants:

1. 〔t〕 varmint=vermin (p. 172. a company of Locker)/salt=sale (p. 104. Haley)/wish't=wish (p. 185. (Prue)

2. 〔w〕 gwine=going (p.24. Chloe, p.68. Sam)

J. Wright は，子音特に唇音が先行する後母音の前で，あるいはもっとまれには軟口蓋音，歯音，鼻音あるいは流音が先行する時に〔w〕が発達したと述べ，更に，この〔w〕は先行の子音が唇音である時は主に南中部，南部，南西部方言に限られる[40] と言う。米国ではこの形は南部式発音の特徴の一つで，特に黒人音であるが，しかしこの発音は英国南部英語にまで遡ることができる昔の米語発音の多くの特徴の一つとして伝播されたものであり，かつては米国南部と同様に北部でも current であったが，1830年までにはとても旧式な発音とされたらしい。現在でもこの *gwine* は old-fashioned, rustic, poorly educated speakers の間で南部に限らず北東 New England でも見い出せる[41]。

3. 〔n〕 hern=hers (p.24. Chloe)/ourn=ours(p.42. Sam)/yourn=yours (p.59. Haley)

s の代りの *n* の使用は勿論米語の造語ではなく英語方言の多くに見い出せる。17世紀のアメリカの文法学者のこのような形への批難にもかかわらず，popular speech に脈々と生き続け今日では substandard になった感がするが，R. I. McDavid によると /-n/ 形は regional pattern を示し South Midland に属する[42]という。

3. 〔b〕, e.g. I'se 'quired what yer may call a hahit o' *bobservation*(=observation) (p. 45. Sam)/Dar ar's *bobservation* (p. 45. Sam)

Ⅵ CONCLUSION

私が今まで述べた黒人達の発音は，音声学的理由によるものを除き大部分は古い native English の要素の名残りか英語方言音の伝播によとことが解る。今とくに母音について総括すると次の表を得ることが出来る。

A. Shifting to 〔ɑ:〕
1. 〔ə:〕>〔ɒ:〕 ……N.W.D.
2. 〔ɛ:ə〕>〔ɑ:〕 ……N.W.D.
3. 〔æ〕>〔ɑ:〕……N.W.
4. 〔ɔ:〕>〔ɑ:〕 ……N.W.

B. Shifting to 〔θ〕
1. 〔ʌ〕>〔e〕 ……N.W.D.
2. 〔i〕>〔e〕……N.D.
3. 〔æ>〔ɛ〜e〕 ……N.D.
4. 〔ei〕>〔e〕 ……N.D.
5. 〔ɔ〕>〔e〕 ……N.

C. Sifting to 〔i(:)〕
1. 〔ɛə〕>〔i:〕……N.
2. 〔ə〕>〔i〕 ……N.
3. 〔ʌ〕>〔i〕 ……N.D.
4. 〔e〕>〔i〕 ……N.D.
5. 〔ə:〕>〔i:〜iə〕……N.W.

D. Shifting to 〔o〕
1. 〔e〕>〔ɔ〜o〕……N.D.
2. 〔ʌ〕>〔ɔ〜o〕……N.W.D.

E. Shifting to 〔æ〕
1. 〔ə:〕>〔æ〕……N.W.D.
2. 〔e〕>〔æ〕 ……N.W.

F. Shifting to 〔ʌ〕
1. 〔u〕>〔ʌ〕 ……N.D.
2. 〔ə:〕>〔ʌ〕……N.W.D.
3. 〔ɑ:〕>〔ʌ〕……N.
4. 〔ou〕>〔ʌ〕……N.W.D.

G. Shifting to 〔ə(:)〕
1. 〔ɔ:〕>〔ə〕……N.D.
2. 〔ou〕>〔ə(:)〕 ……N.W.D.

H. Other Cases
1. 〔iə〕>〔i:〕……N.W.D.
2. 〔iə〕>〔ɛ:〜e:〕 ……N.W.
3. 〔iə〕>〔ɛə〜ɑ:〕……N.
4. 〔iə〕>〔ɛ〕 ……N.
5. 〔ɔi〕>〔ai〕……N.W.D.
6. 〔ɑ:〕>〔e:〜ei〕……W.

先ず第一に上の表から全部で30の音声的変異のうちで15が黒人と白人の双方で使用されていること，そして ***raytherを***除く14が黒人のみによって使用されていることが解る。しかしもし無教養の白人がこの作品の中でもっと登場の余地や situation を与えられるならば彼等は更に多くを黒人達と分ち合うことが予想されるので，我々はこの作品の黒人の英語は無教養な白人の話す英語とあ

まり変らないと思い込みがちである。確かに今では黒人に特有とされる /θ/ と /ð/ の異音，〔v〕>〔b〕の推移や *gwine*, *turry* 等を除外すればそう言えるかも知れないが，しかし厳密に言えばそれは必ずしも正しくはない様だ。つまり黒人英語は他のアメリカの方言とリズム，イントネーションや肉体的な面から来る音質の違いの点で異なっていると見るべきである。そしてこれらの諸要素が因となってあの独得のアクセントや調音を生ぜしめて黒人英語を形成している。勿論黒人でも中流以下の労働者の場合である。実際，ストウ夫人もこの作品の中で Black Sam が「へえ！」と答えた台詞に黒人の間でそれを聞いたことのある者にだけ解る筆舌しがたいイントネーションでそう言ったと説明的に書いているし，また他の箇所では作者は黒人の少女トプシーが歌をうたう場面を「澄んだ甲高い声で奇妙な黒人の歌をうたい始め……黒人の音楽に特有の異様な咽喉音 guttural sound をすっかり出してみせた　云々」と書いており，作者も黒人の話す英語をある程度別のものだと感じているように思う。更に H. L. Mencken もその著 *The American Language* の *Supplememt* Two の p. 264－5 で「下積の貧乏人のニグロの言葉の音韻は最下層白人のそれに非常に似ていて多くの有能な観察者とりわけ南部人達までがそれが実質的に同一であると言明した程であるが，しかしあらゆる階層の黒人達と一緒に暮してみて私自身の信念はこうである—少なくともイントネーションの点でそれは特別な型を示していると。教養のある黒人でさえこのイントネーションをめったに失なわない云々」と述べている。

第二として，この作品に於ける黒人英語は New England の言葉と一見似ているということである。それをより明確にするために，時間的にいくらかのずれがあるが U. O'Neill の New England 農民の言葉で書かれている *Desire Under The Elms* に出てくる発音と比較した。その結果として，現象的にみてすべての変異のうちで19が黒人と分ち合っておりかなりの相関関係を示すのであるから，我々は黒人達はあたかも New Englander であるかの様に話していると結論したくなる。事実 G. P. Krapp もその著 *The English Language in Amercia Vol.* I の p.262 で「Uncle Tom の妻 Aunt Chloe は，ストウ夫人が自分で出来る限りの黒人英語方言を使用しているが，しかし Chloe の言葉でさえその作り出されたイメージは不全完であり，事実それはわずかに南部に当てはまる New England 文学方言である」と言うが，しかし私は O'Neill の作品に現われる方言音はほとんど南部でも見い出せるのであり（北部と南部の英語の起源がほぼ同じであるから当然と言えよう），

更に本当に New England に特有だと思われるものは〔ɔ:〕>〔ɑ:〕と〔ou〕>〔ʌ〕の二つだけと考えられる。〔ɔ:〕>〔ɑ:〕の推移にしても本当に歴史的な音を示しているかどうか疑わしい。というのは黒人は白人を誤って模倣し彼等の native な音声的傾向に合うように reproduce させ〔ɑ:〕の様に発音しているとも限らないからである。そういう訳で全体的にみてこれら黒人達は，南部の側から見れば必ずしも New England 人のように話していないと考えられる。なるほどボストン地域の富と文字的勢力と Harvard 大学の学問的名声は New England 言葉に威信を長年与えていたのは事実であるので，多少の影響を South Midland に及ぼしてもいいはずでありまたストウ夫人が言語形成期を New England で過したことにも原因があるかも知れない。

主人公の Tom は敬虔な Christian であるので God について話す時は，彼の言葉はほぼ標準語に近く作者の文学上の目的を感じさせ人工的な臭いがするが，Chloe と Sam は，その当時の黒人英語らしきものを話しているように思う。

(1 9 7 1. 2. 2 8)

注

1. H. B. Stowe, *Uncle Tom's Cabin* (London: Cassell & Co., nd.), p. 5.
2. H. C. Wyld, *A History of Modern Colloquial English* (3rd ed.; Oxford: Basil Blackwell, 1956), p. 207.
3. G. P. Krapp, *The English Language in America* (Tokyo: Senjo Publishing Co., 1961), vol. I, p. 244.
4. H. L. Mencken, *The American Language, Supplement* Two (London: Routledge & Kegan Paul, 1948), p. 359.
5. ———, *The American Language* (4th ed.; New York: Alfred A. Knopf, 1949), p. 171.
6. Krapp, *op. cit.*, vol. II, p. 78.
7. Mencken, *op. cit.*, *Supplement* Two, p. 88.
8. Krapp, *op. cit.*, vol. I, p. 232.
9. Webster's Third *New International Dictionary of the English Language*, p. 1396.
10. Mencken, *op. cit.*, p. 339.

11. *Ibid.*, p. 360.
12. Krapp, *op. cit.* vol. II, p. 96.
13. *Ibid.*, p. 183.
14. J. Wright, *The English Dialect Grammar* (Oxford: The Clarendon Press, 1968), p. 515.
15. Wyld, *op. cit.*, p. 207.
16. Mencken, *op. cit.*, p. 346.
17. Richard H. Thornton, *An American Glossary* (New York: Frederick Ungar Publishing Co., 1962), vol. II, p. 831.
18. Mencken, *op. cit.*, *Supplenent* Two p. 171.
19. W. Nelson Francis, *The Structure of American English* (New York: The Ronald Press Company, 1958), p. 521.
20. O. Jespersen, *A Modern English Grammar, part* I, (London: George Allen & Unwin 1td, 1965), p. 333.
21. Robert C. Whitford & James R. Forster, *A Concise Dictionary of American Grammar and Usage* (New York: Philosophical Library, 1955), p. 58.
22. Krapp, *op. cit.*, vol. II, p. 93.
23. Wright, *op. cit.*, p. 672.
24. 安井 稔「音声と綴字」(東京: 研究社, 1968), p. 107.
25. Wright, *op. cit.*, §76, p. 71.
26. Charles Kenneth Thomas, *Am Introduction to the Phonetics of American English* (New York: The Ronald Press Co., 1958), p.218.
27. Krapp, *op. cit.*, vol. II, p. 252.
28. *Ibid*, p. 131.
29. Jespersen, *op. cit.*, § 11.39, p. 369.
30. Krapp, *op. cit.*, vol. II, p. 131.
31. *Ibid.*, p. 181.
32. Mencken, *op. cit*, pp. 345−6.
33. C.T. Onions, *The Oxford Dictionary of English Etymology* (Oxford: Oxford University Press, 1966), p. 741.
34. Jespersen, *op. cit.*, §13.9, p. 386.
35. Krapp, *op. cit.*, vol. I, p. 247.
36. *Ibid.*, p. 253.
37. Mencken, *op. cit.*, *Supplement* Two p. 171.

38. Krapp, *op. cit.*, vol. II, pp. 235–6.
39. Mencken, *op. cit.*, *Supplement* Two p. 269.
40. Wright, *op. cit.*, §244, p. 210.
41. Francis, *op. cit.*, p. 522.
42. *Ibid.*, p. 521.